



2019
No.
115

contents

特集	パリ大津絵展開催記念 企画展 P1～P3 大津絵 ―ヨーロッパの視点から―
学芸員のノートから	悉皆調査するということ P4～P5 法明院史料調査より
活動報告	常設展示 P5 大津絵コーナーのリニューアル
収蔵品紹介	葛川村延宝検地帳（葛川坂下町蔵） P6



大津市歴史博物館

令和元年 8 月 20 日 発行

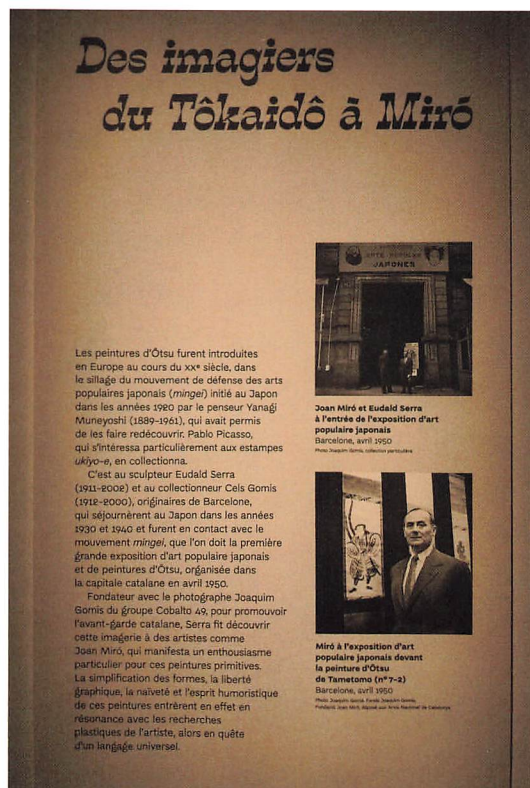
〒520-0037 大津市御陵町 2-2
TEL(077)521-2100
<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

特集

パリ大津絵展開催記念 企画展

大津絵

―ヨーロッパの視点から―



「東海道の絵師からミロへ」コーナー



大津絵 槍持ち鬼奴 江戸時代 フランス・個人蔵

パリでも大津でも、大津絵が勢揃い

去る4月24日から6月15日まで、パリ日本文化会館で、企画展「OTSU-E : peintures populaires du Japon (大津絵ー日本の庶民絵画ー)」が開催されました。

本展は、約120点の作品・資料が展示された充実した大津絵展であるばかりでなく、このように大規模な大津絵の展覧会の開催自体がヨーロッパで初めてのことでした。

内容も、江戸期の大津絵に加えて、浮世絵の大津絵や近代の絵変わり大津絵および史料等が紹介されました。さらに、鬼の念仏をはじめとした大津絵フィギュアともいえる立体



ずらりと並んだ大津絵フィギュア

作品が19点も並び、フランスの方々の眼を楽しませました。

もっとも、ヨーロッパで従来より知られていた日本美術と



言えば、浮世絵や根付、伊万里焼などであり、大津絵の知名度は皆無といえる状況でしたが、本展には7480名の方々にご来場いただくことができました。これは、知名度が無かったハンデを考えると大健闘した数字といえます。

このように、多くの



会場内の様子

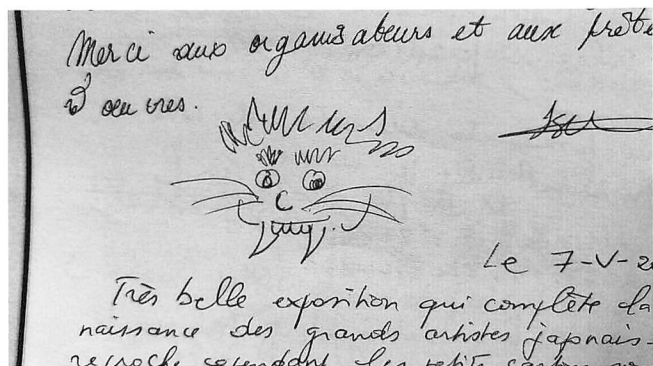
フランスの方々が、未知の日本美術の展覧会にもかかわらず来館されたのですが、彼らがみせた反応は、一体どのようなものであったのか、会場に設置された感想ノートから数例をご紹介します。

「新しい（絵画）テクニックの発見。とても美しい、かつ勉強になる展覧会」、「日常、そして庶民画からの気づき。滑稽で詩的」、「全てがあり、かつ明快！知識やテーマが分からなくても楽しめた。」

実に斬新な感想です。フランスの方々は、大津絵の特徴を实によく理解して楽しみ、大津絵の絵画造形そのものに魅せられて楽しんでいただけたことがわかります。

そのことは、感想ノートにも如実に表れていて、感想文も、5・6行にも及ぶ熱い記述が多くみられ、さらに、鬼のイラストを添えた方が何人もいらっしゃいました。これを見て筆者は、フランスの方々は、大津絵を美術として鑑賞している以上に、漫画やアニメに続く日本のキャラクターとして、「お気に入り」に加えていただいたのだと思いました。

さらに、アンケート結果も、上記の反応に呼応するかのうに、当館の予想を上回るものでした。まず、大いに満足が79.6%、そして満足が16.9%、普通は3.5%であり、不満・大いに不満にいたっては、ともに0%でした。



鬼のイラスト

このようにフランスで好評であったパリ大津絵展を記念して、同展で展示された作品約 70 点を中心に、大津市歴史博物館では、ヨーロッパの文化人や芸術家の視点からみた大津絵という切り口でパリ展を再構成して、下記の通り、展覧会を開催します。

◇企画展「大津絵 ―ヨーロッパの視点から―」

会期：令和元年 10 月 12 日（土）～ 11 月 24 日（日）

パリ大津絵展における成果の一つは、日本からの出品だけでなく、ヨーロッパにおける大津絵の所在を確認し、それらを多数展示した点にありました。

このことからわかるように、ヨーロッパにおいては、大津絵は、一部の人々の間では認識されており、有名な美術商の林忠正やチコティンが扱ったことや、フランスの人類学者ルロワ＝グーランによる大津絵調査、スペインのゴミスやセラによる収集、ミロの大津絵への傾倒、ピカソによる大津絵の所蔵、などが分かっています。

これら、ヨーロッパの人々による大津絵への熱い眼差しを、ぜひとも紹介したく、大津歴博の秋の企画展では「ヨーロッパの文化人や芸術家の視点からみた大津絵」というテーマで展示をいたします。

展示では、従来、日本では知られていなかった、大津絵とヨーロッパとの関係を写真パネル等で紹介する一方で、大津絵の表現がどのように彼らに受け止められ、影響を与えたのかという点について、パリ展の展示コーナーを一部再現しつつ展示いたします。以下、パリ大津絵展の展示風景をもとに、今秋の展示の一部を紹介したいと思います。

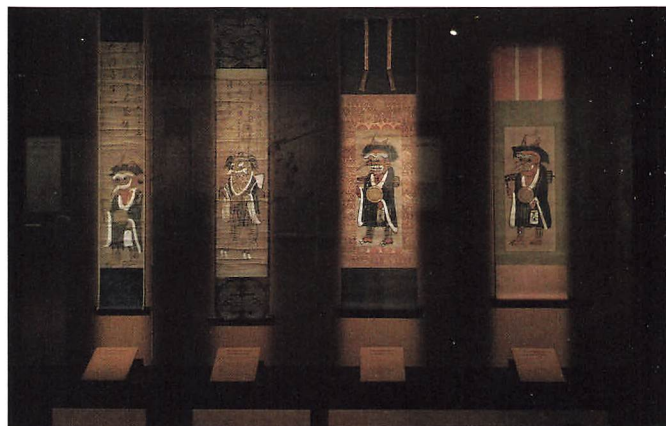
まずは、「1950 年 バルセロナ日本民芸展コーナー」です。1950 年、民芸愛好家のセルソ・ゴミスと現代彫刻家のエウダル・セラの尽力によって、バルセロナの王立美術協会主催で、スペイン初の日本民芸展が開催されました。同展においては、5 点ほどの大津絵が陳列されただけでなく、スペインを代表する 20 世紀の画家ジョアン・ミロが訪れ、



バルセロナの日本民芸展を訪れたミロ（右は同展出品の大津絵）

ことのほか大津絵に注目し、作品と一緒に記念撮影をするなど、深く大津絵に傾倒するきっかけとなった展覧会であったことに焦点をあてます。あわせて本コーナーでは、同展のパンフレットや目録資料も展示いたします。

つづいては、「鬼 Demons コーナー」です。



鬼 Demons コーナー

大津絵の画題で、人気の高さや画題バリエーションの豊富さにおいて、鬼の右にでるものはありません。本コーナーでは、17 世紀にまでさかのぼる最古級の強面の鬼から、滑稽で憎めない姿となった 18 世紀の鬼たちまでが一堂に会します。様々に変化する鬼たちに会いに来てください。

最後は「絵変わり大津絵 コーナー」です。

フランスをはじめ、ヨーロッパでは、本来の街道の土産物の大津絵だけでなく、アレンジされた大津絵が、密かな人気ジャンルでした。画家や文化人が趣味で描いた大津絵や、根付や彫像などにアレンジされた大津絵などが好んで収集されました。とりわけ本コーナーでは、19 世紀末のジャポニズムの時期に収集されたデヌリー美術館のコレクションにスポットを当てます。

パリ大津絵展を見た方も、そうでない方も、これまでとはひと味違う大津絵をぜひご覧ください。

（学芸員 横谷賢一郎）



悉皆(ことごとくみんな)調査するということ 法明院史料調査より

平成 31 年 3 月 2 日（土）から 4 月 14 日（日）まで開催された、当館企画展「フェノロサの愛した寺 法明院—三井寺北院の名刹—」では、連日大変多くの方が来館され、盛況のうちに終えることができました。

明治時代に来日したフェノロサやビゲローらが愛した法明院そのものの歴史を紹介する初めての展示で、課題も多々残りましたが、それ以上の成果を残せたのではないかと思います。

当初、展示のベースとして考えていたのは、先に調査の終わっていた掛け軸などに合わせて、池大雅や円山応挙、鶴沢探索らによる堂内の襖絵など、主に絵画史料でした。また、「法明院展」という名前では一般の方々に馴染みがないため、できるだけわかりやすい名前を考える必要がありました。そこで思い浮かぶのが、アーネスト・フランシスコ・フェノロサや、ウィリアム・スタージス・ビゲローというアメリカ人です。彼らは、明治時代に日本を訪れ、日本美術の収集を進める傍ら、文化財の保護にも尽力した人物として知られています。彼らは当時法明院住職であった桜井敬徳から受戒しており、彼らに関する史料が今も法明院に残されています。当館では、既に法明院から近代史料を一括でお預かりしており、目録を作成していました。そこで、「絵画作品」と「フェノロサ・ビゲロー」の二本立てで行こうと考えていました。

まず初めに、法明院そのものの歴史を考える必要があるのですが、これまで法明院の歴史を紹介したものはほとんどなく、不明瞭な点が多々ありました。そこで、まずは法明院に所蔵される史料を把握することから始めました。そのうちの 하나가、法明院の版本聖教の調査です。法明院には、歴代住職が集めたおよそ 7000 冊を越える膨大な書物が遺されています。しかし、中身がどのようなものか不明であったため、およそ 30 年近く前に版本聖教の悉皆調査をしていた滋賀県立琵琶湖文化館から目録をお借りし、デジタルデータ化を行いました。そして、どう考えても人手と知識が足りないため、龍谷大学の犬谷由香先生をはじめ、仏教学を専門とする方々にご協力を賜り、まずはこれを改めて調査しようということになりました。それと並行して、池大雅や円山応挙、鶴沢探索らによる襖絵の調査と撮影を行いました。



法明院版本聖教の調査風景

こちらについては、大阪芸術大学の五十嵐公一先生にご協力を賜ることができ、数多くの新知見を得る事が出来ました。そして、フェノロサやビゲローら近代に関する調査については、愛知学院大学の井上瞳先生にご協力いただくことで、特にビゲロー直筆の手紙類などの翻訳を進めることができました。

このようにして、各先生方のご協力を賜りながら手探りで調査を進めて行ったのですが、その最中、大阪大谷大学の宇都宮圭吾先生から、「法明院には非常に重要なお経がある」というお話がありました。実は法明院の屋根裏には、ほとんど手つかずの史料が大量に保管されていたのです。いずれはと思いつつ、あまりの量の多さになかなか踏み切りがつかなかったのですが、ご住職にご相談し、これも悉皆調査することになりました。ただし、お寺と当館の都合から、史料の引上げは 11 月に行うことになりました。

11 月末、大谷先生と井上先生にご同伴いただき、ご住職立会いのもと、法明院の屋根裏にある史料の悉皆調査を行いました。暗くてホコリとカビが充満した屋根裏でひたすら史料を確認し、それらを下に降ろして車に積んで館に運び込む作業を丸 1 日かけて行いました。終わるころには全身ホコリだらけ、マスクの内側が真っ黒という状況でしたが、結果としておよそ館内の 1 部屋がまるまる埋まるほどの量となりました。これだけ大量の史料が見つかった驚きや喜びも当然ありましたが、それと共に、企画展開催を 3 月に控えた時期でもあり、史料を前に「どうしよう？」という困惑を抱えながら、とりあえずはできる範囲で掃除と整理を行いました。

焦りが募っていく中でひたすら作業をしていた矢先の 12 月初め、ご住職から連絡が入りました。「また出てきた」と。



新発見の法明院史料（一部）

屋根裏とは別の場所から、新たに大量の史料が出たということで、急いで法明院へ向かうと、押し入れいっぱいに納められた史料の山が待ち構えていました。その場でいくつか開いてみると、江戸時代よりも古い中世のものが次から次へと……。眩暈を覚えながらひたすら梱包して館に運び入れている時の、驚きと困惑が入り混じった感情は今でも忘れられません。その後調査が進むにつれて、フェノロサ

やビゲローらの受戒に関わる直接的な古文書や、現存最古の内容と思われる「二十五三昧式」といった貴重な史料が大量に発見されました。そのうちのごく一部分は企画展で公開することが出来ましたが、大部分ははまだ調査中で、その後も重要な史料が続々発見されています。

色々あった企画展も無事(?)終わり、さぁこれから・・・と、考えていたところ、改元後の5月中旬、出陳品の返却で法明院にお伺いした際に、また別の押し入れに大量の史料がしまわれているのを見つけました。後日改めて調査に行ったところ、大量の古文書の中から、宇都宮先生が仰られた「重要なお経」が発見されました。それも当初の想定をはるかに超えた量が……。実は、先の悉皆調査では確認できなかったため、「もう失われてしまったのでは?」との危機感があったのですが、企画展の終了後に悉皆調査の本命が見つかるという、大どんでん返しが待っていたのです。

現在も、たくさんの方々にご助力いただきながら少しずつ調査を進めています。いずれは新しく見つかった史料を紹介できればと考えていますが、あまりの量の多さにいつになるやら……。

(学芸員 鯨井清隆)

活動報告

常設展示 大津絵コーナーのリニューアル

常到大津絵を数多く鑑賞できる施設があればという要望に応じて、常設展示室内の大津絵展示を拡充しました。

これまでは軸装 5 幅程度の展示でしたが、リニューアル後は、大津絵の軸装 10 点のほか、大津絵の図柄を用いた菓子木型や大津絵人形などをあわせて展示し、常時 20 点程度の関係資料で、いつでも大津絵の魅力に親しんでいただけるようになりました。展示では、大津絵以外にも、大津算盤や和菓子など、江戸時代の大津の名産品や商工業の全体像が理解できるように工夫しました。作品は 2 ～ 3 か月を目途に展示替えを行ないますのでお楽しみに!



賑やかになった大津絵コーナー

葛川村延宝検地帳（葛川坂下町蔵）

元禄 11 年（1698）、本堅田に拠点をおく堅田藩領（堀田家）が成立し、湖西の村々が領地に組み込まれました。その中で、葛川地域の8ヶ村のうち7ヶ村が堅田藩領になったことは意外に知られていません。昨年度、天津市歴史博物館では、その支配や村政の実態を調べるため、地元古文書や古記録が残されていないか、葛川学区自治連合会を通じて各自治会にお尋ねしました。その後、坂下町から「古い資料がある」とお応えを頂き調査にお伺いしたところ、堅田藩に關係する古文書を数点見出すことができました。

ところが話はそこで終わりません。実は坂下町共有文書の中から、堅田藩領時代以前の歴史を知る、非常に重要な史料「葛川村延宝検地帳」を発見したのです。

検地といえば、土地を測量して米の産出量を確定し、そこから税金（年貢）を算出するための前提作業で、豊臣秀吉による太閤検地や、徳川氏による慶長7年（1602）の近江検地などが有名です。今回発見の検地帳は、延宝5～7年（1677～79）、畿内近国の幕府領（天領）の村々で実施された検地時のもので、それまでとは異なり、6尺を1間、300歩を1反、田畑の等級を上々・上・中・下・下々の5段階とするなど、統一基準が設けられた検地でした。近江国では、同7年に彦根藩井伊直興と大垣藩戸田氏西により実施され、村ごとに1冊ずつ作成されました（もしくは村の規模により数冊に分冊）。また、基本的にこの測量データが幕末まで利用されましたので、葛川7ヶ村が幕府領から堅田藩領へと変更となった後も、この延宝検地データが運用されたということになります。

そこで、「葛川村延宝検地帳」を詳しくみると、まず延宝7年3月7日付で、戸田左門（氏西）家臣の戸田権兵衛を検地惣奉行として、当（葛川）村検地奉行に西嶋芝右衛門・堀内ハ太夫・杉田全平の3人が担当して実施・作成されたことがわかります。

ただし注目したいのは、この検地帳が坂下村だけでなく、当時山門（延暦寺）領であった坊村を除く、幕領であった葛川村7ヶ村すべてのデータを1冊にまとめたものであった点です。

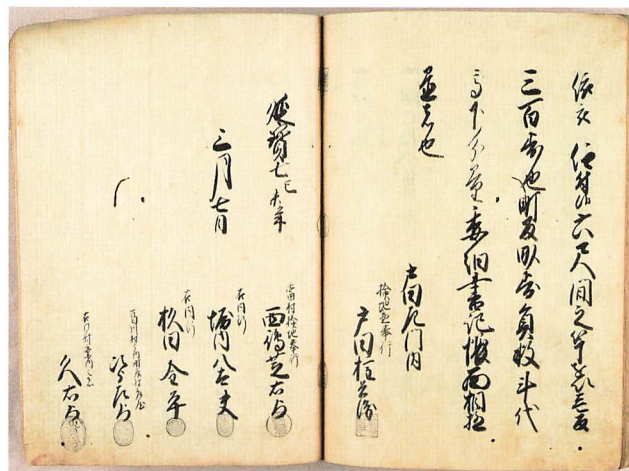
その記載内容は、村ごとに、①所在する字名、②「古検」（慶長7年に実施された際の土地の広さ）、③種別（田・畑・屋敷地）と等級、④（延宝検地時の）土地の広さ、⑤分米（算出された年貢量）、⑥耕作人、⑦斗代（査定された平均収穫量）を書き上げます。また筆数（土地の登記単位）は、坂下（266）・木戸口（236）・中村（408）・町居（128）・榎（18、幕府領のみ）・貫井（214）・細川（327）の合計1597筆を数え、総面積にして44町3反4畝25歩（約44ヘクタール）、石高にして304石6斗5升6合となり、土地の種別を見ると、ほぼ「畑」で占められていて、検地帳からも葛川の山間村落としての特性も見えてきそうです。

さらに検地帳には、これ以外に年貢徴収の対象になっていない荒廢地（109筆）が、22町5反3畝8歩（約22ヘクタール、年貢高にして201石6升4合）も記録され、葛川7ヶ村の土地のうち、水害や百姓の耕作放棄等による荒廢地が相当数あったこともわかります。これらは葛川7ヶ村分の合計約1,700筆のデータを一つ一つエクセルに入力してみて、ようやく

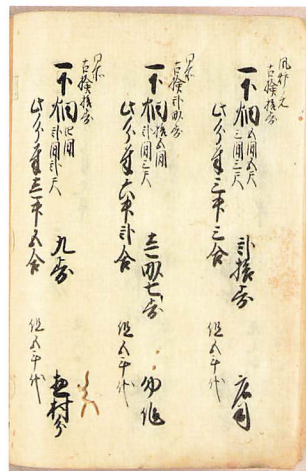
見えてきたものです。

今回、堅田藩関係資料のための史料探索が思わぬ発見をもたらしましたが、堅田藩領時代も含め、葛川地域の支配や土地利用、さらに住人の生活史の解明は、まだまだこれからです。長い道のりになりそうです。

（学芸員 高橋大樹）



（検地帳末尾）検地奉行らによる署名部分



（検地帳部分）3筆分を記載